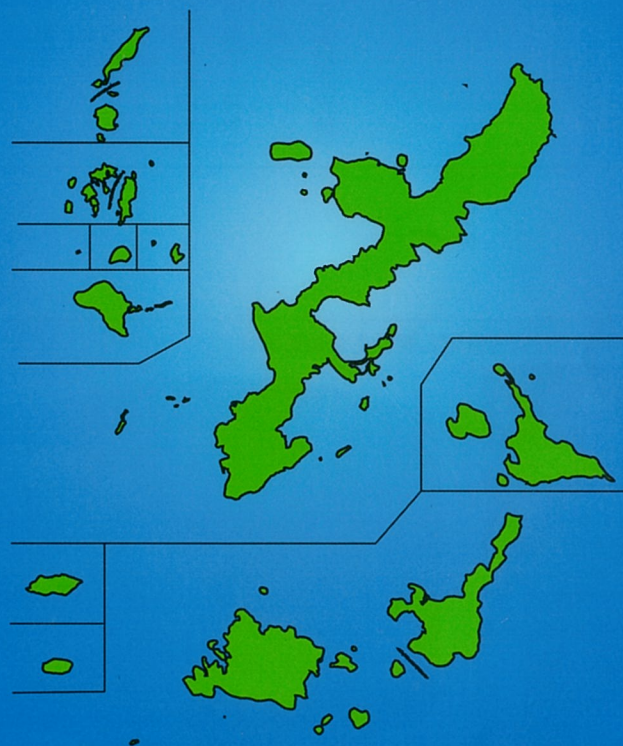


平成14年度 沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展

復帰後三十年間の 県内発掘調査展



平成14年11月16日(土) ~ 12月22日(日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

復帰後三十年間の発掘調査年表

西暦	1970	1980
調査年	1969 1974 1973 現在 1973, 1974, 1976, 1979 1974, 1982, 1984, 1986 1974 1974, 1985, 1987 1974 1974, 1977, 1979 1974 1974, 1977 1974 1974, 1977, 1979 1974 1974, 1977, 1979 1975 1975 1977 1977 1978, 1980, 1981 1979 1980, 1981, 1982 1982 1982 1983 1983 1983, 1984 1983, 1984 1983 1983 1984, 1985, 1995 1984, 1985, 1995	1980, 1981, 1988 1981, 1982 1982 1982 1983 1983 1983, 1984 1983, 1984 1983 1983 1984, 1985, 1995 1984, 1985, 1995
遺跡名及び主な調査成果	<p>稲福遺跡 柱穴群や鍛冶物跡が検出</p> <p>首里城跡 多量の陶磁器類や遺構が検出</p> <p>座喜味城跡 舎殿跡とみられる石組遺構が検出</p> <p>勝連城跡</p> <p>中城城跡</p> <p>山田城跡</p> <p>仲泊遺跡 遺跡の重要性から保存運動が起こり国道を迂回させる (1975年国指定史跡)</p> <p>座喜味城跡</p> <p>室川貝塚 新たに三型式の土器が設定</p> <p>今帰仁城跡</p> <p>渡具知東原遺跡 曾畑式土器・爪形文土器の出土</p> <p>具志川島遺跡群 沖縄初の貝輪着装人骨が検出 (1978年国指定史跡)</p> <p>渡具知木綿原遺跡 沖縄初の箱式石棺墓が検出 (1978年国指定史跡)</p> <p>西長浜原遺跡 沖縄初の集落跡が確認</p> <p>大田原遺跡・神田貝塚 隣接する両遺跡の層序関係で早稲田編年のI期とII期の逆転が確認</p> <p>宇堅貝塚群 鉄斧の出土 (1986年国指定史跡)</p> <p>仲原遺跡 縄文時代晩期の住居跡が23棟検出 (1986年国指定史跡)</p> <p>稲福遺跡 柱穴群や土壇が検出</p> <p>浦添城跡</p> <p>シヌグ堂遺跡 縄文時代晩期の住居跡が43棟検出</p> <p>トウグル浜遺跡 与那国で初めて確認された先史遺跡</p> <p>長間底遺跡 宮古地域で初めての先史遺跡が発見</p> <p>古我地原貝塚 沖縄で最古(約四千年前)の住居跡が検出</p> <p>具志堅貝塚 弥生土器の出土 (1956年県指定史跡)</p> <p>下田原遺跡 早稲田編年I期とII期の逆転が再確認 (1956年県指定史跡)</p> <p>北谷城跡</p> <p>具志原貝塚 (1986年国指定史跡)</p> <p>清水貝塚 広田遺跡(種子島)で見られるような貝符が発見</p>	<p>1972 日本復帰</p> <p>1975 海洋博</p>
その他	1972 日本復帰	1975 海洋博



保存運動(仲泊遺跡)



箱式石棺墓の検出
(渡具知木綿原遺跡)
読谷村教育委員会



住居跡の検出
(仲原遺跡)



爪形文土器の出土
(渡具知東原遺跡)
読谷村教育委員会



柱穴群・土壇の確認
(稲福遺跡)



貝輪着装人骨の検出
(具志川島遺跡群 伊是名村教育委員会)



編年の逆転を確認
(大田原遺跡・神田貝塚)

1990															2000															
1985, 1986	1985, 1986	1986, 1987, 1988, 1989, 1990, 1991, 1994, 1995	1985, 1988	1986	1986, 1987	1986, 1987	1986, 1988	1986, 1990	1986, 1990, 1993, 1994, 1998, 1999	1987	1987	1987, 1988	1987, 1988	1988	1988, 1989, 1992, 1994, 1996	1989, 1990	1987, 1990, 1991, 1992, 1994, 1995, 1999	1991	1991, 1993, 1995, 1999	1992, 1994	1992, 1995, 1998, 2000	1994	1994, 1997	1994, 1998	1995	1996, 1997	1998, 現在	1999, 2001	2000	2000
奇伎・赤崎貝塚 開元通寶が33枚出土	越来城跡	湧田古窯跡 窯体が8基検出	真志喜安座間原第一遺跡 弥生時代並行期の集落跡・墓群が検出	クマヤー洞穴遺跡 数百体の改葬人骨が検出	新里村跡 八重山式土器と滑石製石鍋が共伴して出土	喜屋武クスク	高嶺遺跡 20軒の住居跡のうち15軒は炉跡をもつ住居跡が検出	糸数城跡	喜屋武城跡	安座間原第二遺跡 弥生時代並行期の竪穴住居跡が検出	漢那ウエーヌアタイ遺跡 鍛冶関連の遺物・遺構が検出	浦底遺跡 貝斧が大量に出土し、多数の焼石集積が検出	嘉門遺跡 弥生土器の出土、アンボンクワザメ等の貝集積が検出	喜友名東原又バタキ遺跡 炉跡のある大型竪穴住居跡が1軒検出	壺屋古窯群 窯跡5基、建物跡内にろくろ跡6基が検出	宇堅貝塚 漢式三角鏡、後漢鏡が出土	銘刃古墓群 15, 16世紀の古墓が約300基発見	連道原遺跡 開元通寶が10枚出土	添道遺跡 宮古地域で初めて下田原式土器が出土	平敷屋トウバル遺跡 平地式の掘建柱建物の検出	伊佐前原第一遺跡 畑跡と考えられる列状ピット群の検出	伊祖の入れ御拝領墓 銘書より近世百姓の墓と確認	首里城跡京の内跡地区 大量の陶磁器がまとまって出土	斎場御嶽 三庫理から勾玉・青磁器・銭貨が一括して出土	ピュウツタ遺跡 タイプの異なった文様の下田原土器の出土	前原遺跡 竹カゴに入った木の実、沖縄初の丸木舟の舳先が検出	戦争遺跡分布調査の開始	ヤツチのガマ・カンジン原古墓群 千体以上の人骨が検出	大堂原貝塚 編年が詳細に検討できる資料が出土	伊礼原C遺跡 クシガ出土

2000 沖縄県立埋蔵文化財センター 1開所

2000 「首里城京の内跡」出土の陶磁器が国の重要文化財に指定

2000 「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産に登録

※年表には主な発掘調査を取り上げています。 青字：展示会で取り上げた遺跡 赤字：主要な事柄



イモガイの集積 (具志原貝塚)



貝符の出土 (清水貝塚 久米島町教育委員会)



竹カゴ(パーキ)の検出 (前原遺跡 宜野座村教育委員会)



窯体の検出 (湧田古窯跡)



焼石集積の検出 (浦底遺跡 城辺町教育委員会)



戦争遺跡分布調査 (南風原陸軍病院壕群)

凡 例

- 1 本書は、2002年11月16日（土）～12月22日（日）まで開催する企画展「復帰後三十年間の県内発掘調査展」の展示を補完するものとして編集したものである。
- 2 本企画展は、沖縄県立埋蔵文化財センターが主催し開催する。
- 3 本書の順序は、展示の各コーナーに沿って掲載している。
- 4 本展示に関わる協力機関の芳名は巻末にまとめて列記する。
- 5 提供していただいた写真には、機関名を明記している。
- 6 本書に掲載されている写真の無断使用は固く禁じます。

目 次

復帰後三十年間の発掘調査年表

目 次

ごあいさつ

復帰後30年間の県内発掘調査 1972～2001年	1
沖縄の原始～グスク時代の時期区分（編年）	4

沖縄貝塚時代早～中期（縄文時代）

沖縄貝塚時代早～中期（縄文時代）	5
渡具知東原遺跡	6
古我地原貝塚	7
室川貝塚	8
仲原遺跡（国指定史跡）	9
仲泊遺跡（国指定史跡）	10
具志川島遺跡群（伊是名村指定文化財）	11
前原遺跡	12

沖縄貝塚時代後期（弥生～平安時代並行期）

沖縄貝塚時代後期（弥生～平安時代並行期）	13
弥生文化の影響と沖縄の先史文化	
具志原貝塚（国指定史跡）	14
渡具知木綿原遺跡（国指定史跡）	15
清水貝塚	16
平敷屋トウバル遺跡	17
宇堅貝塚群	18

グスク時代

グスク時代	19
稲福遺跡	20
首里城跡	21

近世・近代

近世・近代	22
湧田古窯跡	23
銘苅古墓群	24
戦争遺跡詳細分布調査	25

先島

先島	26
先島の考古学編年	27
浦底遺跡	28
添道遺跡	29
ピユウツタ遺跡	30
大田原遺跡・神田貝塚	31
下田原貝塚	32
トゥグル浜遺跡	33
開発と埋蔵文化財	34
発掘件数の推移	34
用語解説	35
参考文献	36
協力者一覧	
遺跡分布図	

ごあいさつ

沖縄が日本へ復帰してから現在までの30年間に、数多くの埋蔵文化財発掘調査がおこなわれてきました。発掘は動機によって学術発掘と行政発掘とがあり、さらに行政発掘は保存整備に伴う発掘と現地保存ができない記録保存発掘とがあります。しかし、動機は異なっても、遺跡における発掘は当然学術的な理論と技術によっておこなわれるわけで、その実施方法や内容はまったく同じです。また、当初は記録保存を前提に発掘したのが、きわめて重要な遺構が発見され、史跡指定を受けて現地保存に至った例もあります。

これまでの30年、当初の発掘件数は総数としても少なかったのですが、年を追うごとに増加してきました。それは、本土に比べて多くの分野で立ち後れていた沖縄に対して、さまざまな沖縄振興開発事業がとりくまれたことが最も大きな要因といえます。道路、空港、^{ほじょう}圃場整備、区画整理、米軍施設、上下水道などの公共工事の予定範囲に遺跡があり、その記録保存のために発掘をおこなうという事例が圧倒的に多いといえます。一方では、文化財行政機関が埋蔵文化財保存事業に盛んにとりくむようになり、文化庁の補助を受けて遺跡分布調査、重要遺跡範囲確認調査、史跡保存整備などの事業を積極的に展開したことも発掘件数の増加につながっています。一方、大学等による研究上の目的を動機とした発掘は、それほど増えたとはいえませんが、県外の研究者が琉球諸島の考古学研究のために発掘をおこなうという事例が加わるなど、復帰前との違いがみられます。

諸開発にともなう発掘は、多数の遺跡をわずか30年の間に現地から消滅させてしまうという残念な面もありましたが、一方では長期的な大規模発掘によって、小規模調査では発見できなかった遺構・遺物が検出されるなど、学問上の新しい知見を豊富にもたらしました。同様に、文化財保護当局の企画による遺跡別、地域別、時代別、性格別の遺跡調査事業も、考古学上の数多くの発見につながりました。

また、30年前に県文化課にたった1人だけであった埋蔵文化財担当職員が、現在は県・市町村あわせて69人と飛躍的に増加しています。そのような状況のなかから、当県立埋蔵文化財センターが設立されました。

このたびの展示会は、30年の発掘調査のうち主な遺跡について写真や出土品を編成したものです。多くの方々が大地下に残された先人の歩みを具体的な遺物でたどり、それぞれの歴史像を描いてみることをおすすめします。

2002（平成14）年11月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 安里 嗣 淳

平成14年度 企画展

復帰後三十年間の県内発掘調査展



復帰後30年間の県内発掘調査

1972～2001年

日本復帰の年である1972（昭和47）年度は、とくに発掘調査は実施されていません。おそらく、復帰前の雰囲気はまだ残っていたのでしょう。復帰前までは、まだ大規模開発工事は盛んではありませんでした。当時の行政当局である文化財保護委員会も、学術的動機で勝連城跡や宇佐浜遺跡の発掘調査を数年次も実施するなど、今思えばまだノンビリとした時代でした。とはいえ、ゆとりがあったのではなく、開発工事によって知花遺跡、仲宗根貝塚、^{たくし}沢岬グスクなどが、十分な記録保存措置をすることもなく破壊されたりしています。行政も、社会も文化財の保護については、その認識とシステムが熟していなかったといえます。しかし、一方では浦添バイパス工事で消えそうになった浦添貝塚を、文化財保護委員会が保存キャンペーンの新聞まで作って保存を訴え、琉球政府を動かして保存させたという輝かしい実績もあります。浦添バイパスの伊祖トンネルは、そのときに貝塚を保存するためにできたものです。

さて、ノンビリムードも長くは続きませんでした。1973（昭和48）年度夏には、久米島空港の拡張工事に伴って北原貝塚が、年度末の1974（昭和49）年3月には国道改修工事のために恩納村仲泊遺跡の発掘調査が実施されています。当時の県教育庁文化課埋蔵文化財担当職員はたったの1人でした。北原貝塚の場合は、夏休みに大学や高校にいる考古学研究者の一時的応援を得てしのいだのですが、ついに仲泊遺跡の場合は3人が増員されて体制の強化が図られました。ところが、仲泊遺跡は大きな保存運動によって国指定史跡となったために記録保存目的の調査は1974（昭和49）年4月で打ち切られます。そこで、増員された埋蔵文化財担当職員は仲泊遺跡の報告書作成のかたわら、この年度に津堅第二貝塚の個人住宅建設に伴う発掘や、宮古の^{なかそねとうゆみやばか}仲宗根豊見親墓の整備にともなう墓室調査などの対応も可能になりました。また、青山学院大学の宮古砂川元島遺跡発掘に参加したり、文化財保護審議会の専門部会委員と一緒に、本部町で天水田遺構の探索調査を実施しています。まだ、復帰前のノンビリした雰囲気もひきずっていたのでしょう。

1975（昭和50）年度までは、まだ深刻な状態には至っていません。圃場整備にともなう石垣島平得仲本遺跡の^{ひらえなかもといせき}緊急発掘が1件だけで、他は^{そばたしきどき}曾畑式土器が発見された読谷村の渡具知東原遺跡、中学生が発見した沖縄市の室川貝塚、無人島の伊是名村具志川島遺跡群の発掘など、開発工事を原因としないものです。

ところが、1976（昭和51）年度から緊急発掘がしだいに増加していきます。採砂、道路工事などが原因です。また前年度から仲泊貝塚を最初の例として開始された史跡整備のための発掘も、この年新たに識名園が加わっています。さらに、首里城跡（歡会門遺構）の発掘も開始されていますが、埋蔵文化財担当職員を投入せず、工事請負業者に単なる土木工事的発掘をさせるという不幸な出発となりました。

1977（昭和52）年度からは緊急調査が急激に増加していきます。そして、このような行政発掘調査が沖縄の考古学的調査の主流を占める状況は現在もお続いています。もちろん、それは日本全体の傾向でもあります。その原因は農業基盤整備、空港、道路、公園、米軍施設、官庁建設、上下水道、区画整理・宅地造成などの工事、そして史跡整備事業などに伴う発掘で、ほとんどが公共事業に関連しています。これは復帰後の沖縄経済が公共事業依存体質を深めていったと分析されていることを、埋蔵文化財緊急調査の原因別でも裏付けているといえます。

行政調査を主体とする発掘は、ほとんどが記録保存措置であり現地から消えてしまうという否定的な面もありましたが、大規模発掘によって集落遺構などが確認できたり、さまざまな新発見があったりと、沖縄考古学を大きく発展させてきたことも事実です。それは記録保存発掘だけではなく、重要遺跡範囲確認調査、遺跡分布調査事業やグスクなどの史跡整備のための発掘でも同じようなことがいえます。

編年研究の進展に関連した発掘では、次のような成果がありました。

- ① 読谷村渡具知東原遺跡における曾畑式土器の発見は沖縄の歴史を従来の最古約3,500年前から約5,000年前へと遡らせ、その後の下層からの^{つめがたもんどき}爪形文土器はさらに今から約6,500年前と古くなりました。嘉手納町の野国貝塚B地点では、爪形文土器が大量に出土するとともに、最下層から無文土器の層を確認しています。
- ② 沖縄市室川貝塚ではいくつかの土器文化の層位的な発掘に成功し、土器の型式についても新たに3つの

タイプを把握しました。また、従来の伊波・荻堂式土器のなかで伊波式が先行タイプであることも層位的に証明されました。

- ③ 八重山石垣島の大田原遺跡・神田貝塚、波照間島の下田原遺跡・大泊浜貝塚では、それぞれ無土器の層が上位に、下田原式土器文化が下位にあることが判明し、従来の八重山の先史時代の時期区分（編年）の順序を逆転させました。これにより、これまで南琉球先史時代の種々のデータの矛盾点がかなり整理されました。
- ④ 八重山竹富島の新里村跡遺跡から八重山式土器の外耳にタテ形があり、形態も滑石製石鍋かっせきせいしなべに近似する土器が発見されました。これによって、八重山式土器のひとつのタイプの出自が滑石製石鍋と関係すること、同じく影響関係にある北琉球のグスク土器とも関連することが明らかになりました。
- ⑤ 沖縄後期に尖底土器とくびれ平底の形態があることは知られていますが、前者が時期的に先行することが把握されてきました。
- ⑥ 伊是名島の具志川島岩立遺跡しーだちいせきでは面縄前庭式土器（の祖型を含む）を中心とする層が確認され、既知の浦添貝塚やその後発掘された石川市古我知原貝塚とともに、この時期の文化期の存在が明らかとなりました。
- ⑦ 宮古島長間底遺跡では、宮古地域で初めてシャコガイ製貝斧文化をもった先史遺跡が発見され、宮古の歴史を従来の最古14世紀から先史時代の約2千年前まで一気に古くしました。
- ⑧ 名護市屋我地島の大堂原遺跡では、いくつかの時期の異なる文化層が確認され、従来の編年をさらに詳細に検討するとともに、豊富な土器、貝器、石器はその文化内容の理解や比較研究に役立っています。

住居跡、先史集落跡の発見では次のような発掘がありました。

今帰仁村西長浜原遺跡、本部町屋比久原遺跡、与那城町シマグ堂遺跡、同町仲原遺跡、高嶺遺跡、勝連町平敷屋トウバル遺跡、宜野湾市喜友名東原ヌバタキ遺跡、同市安座間原第一・第二遺跡、浦添市嘉門貝塚などでは竪穴式を中心とした住居跡の集発が見られ、先史時代の住居やムラの様子が具体的にイメージできるようになりました。

宮古島浦底遺跡では大量の焼石遺構が見つかり、南方世界とのつながりとムラの生活のようすがうかがえます。葬送・墓制に関しては次の発見がありました。

読谷村渡具知木綿原遺跡では九州弥生文化と関係する箱式石棺墓と人骨、宜野湾市安座間原遺跡ではさまざまな形態をもつ墓群と人骨および副葬品が、伊是名村具志川島遺跡群では改葬や焼骨を伴う崖葬墓が発見されました。

特に具志川島の腕に貝輪を装着した人骨は沖縄唯一の発見例として注目されました。北谷町クマヤ洞穴遺跡では数百体の埋葬先史・グスク時代人骨が発見されました。

交流・交易に関しては次のようなことがわかってきました。

九州の弥生時代遺跡から発見される腕輪の一種が従来オニニシとされてきましたが、実は南海産のゴホウラ貝であることがわかりました。その後の発掘の増加で奄美・沖縄の北琉球地域の後期遺跡から、九州との交易に備えた大量のゴホウラ貝やイモガイおよびそれらを素材とした貝輪が続々と確認されました。これによって、弥生時代並行期を中心として九州方面との貝交易ルートが存在したことが明らかになりました。

これに伴って、九州産およびその影響を受けた地元産の弥生土器も沖縄の貝塚から続々と見つかっています。また、弥生時代文化のもう一つの特徴である鉄器や青銅器も少しですが発見されています。ただ、最大の特質である稲作については受容した証拠はまだ確認されていません。

中国の五銖銭ごしゅせん、開元通寶などの発見例も増えてきています。とくに後者は石垣島の崎枝赤崎貝塚と読谷村連道原貝塚では集中して出土しています。従来も奄美徳之島の面縄貝塚および嘉手納町野国貝塚などから複数出土する傾向があり、これらがもたらされた経緯をめぐって、中国との直接的な交流か、九州などを仲立ちとするのか、さらに遣唐使、あるいは海洋商人が関わっているのかなど、研究者間で現在も盛んに議論が続けられています。また、同様にヤコウガイ（夜光貝）を集中して出土する遺跡が奄美を中心に知られていて、この種の貝交易についても壮大な範囲の交易ルートを想定する調査研究が進められています。

土器については、わずかながら韓国南部につながる型式が見つかり、注目されています。沖縄最古の爪形文土器と日本縄文草創期の爪形文土器とは「他人の空似」だとする異論があり、現在その位置づけをめぐる揺れています。石器のうち黒曜石製のヤジリおよびその素材が、縄文時代の終末期にほぼ限定されて出土する例も増えています。沖縄縄文時代文化のあり方が、九州から次第に離れて独自色の強い文化を形成しながらも、断続的につながりをもっていたことを示しているといえます。

域内交流・交易については、石器や粘土材料の入手などで島の南北あるいは島々の間を自由に往来し、「海の道」が近隣間でも盛んに活用されていたことがわかります。それを示すように島々の同一土器型式は区別がつかないほどソックリであり、その移り変わりもほぼ同じ調子で展開しています。

一方、生活文化の内容も多彩であったことが明らかになってきています。

北谷町の伊礼原遺跡ではクシガ、宜野座村の前原遺跡では籠とドングリが原形と色を保って発見されました。ジュゴンやイノシシ骨製の獣形垂飾、サメ歯製やサメ歯状貝・石製品など、ある種の精神文化の存在を想定させる装身具の発見も増加しています。久米島清水貝塚では、沖縄で初めて種子島広田遺跡下層タイプが複数出土しました。沖縄では上層タイプが主ですが、この貝札も何らかの精神生活と関連する可能性をもっています。

北谷町クマヤー洞穴遺跡では長期にわたる時期の土器や多彩な石器、貝製品、骨器のほかにヒスイの管玉があり、どのような交流・交易によってもたらされたのか注目されています。また、琉球列島独自の物質文化の存在もわかってきました。スイジガイ突起部の1本だけを研磨する貝器は南北琉球列島先史時代に共通して存在し、そのさらに南北いずれにも類例は発見されていません。前原遺跡では丸木舟の舳先とみられるものも検出されました。沿岸で漁をしたり、近隣の島々を往来する先史人の姿を彷彿とさせます。

グスク時代遺跡の調査はかなり多く実施されてきました。復元事業および公園整備事業にともなって発掘が続けられている首里城跡では、正殿遺構が複数の時期にわたり、それが概ね文献記録と対比できることが判明しました。城郭内外の石造を中心とした大規模な城壁、施設などが確認され、陶磁器など多彩・多量の出土品が得られています。特に京の内地区からは集中して陶磁器が発見され、その場の機能の理解とあわせてタイ陶磁器もかなりもたらされていることがわかりました。勝連城、今帰仁城、座喜味城、山田城、糸数城、大里城、喜屋武グスク、越来グシク、中城、浦添城、北谷城、久米島宇江城などで大規模あるいは部分的な発掘が続けられ、城郭の構造、機能、範囲の捉え方、時期的な相違、城郭内外の様相などの把握が進められてきました。そして、14世紀の半ば頃には大型のグスクでは基壇を造成して、その上に礎石式建物を造り、前庭部をもつようになることがさらに明確になってきました。さらにグスク時代の集落とみられる遺跡の調査も増加し、集落とグスクの成立・展開をどう理解するかという研究も深まりつつあります。

また、陶磁器の研究がかなり盛んになり、グスク時代の対外交易の展開・交渉圏の様相が詳細になりつつあります。従来、不明とされてきたいわゆる類須恵器の窯跡が徳之島で発見されて、カメヤキと称されるようになりました。そして、その生産と流通の研究は琉球圏の形成、グスクの成立期をめぐる議論にも重要な要素となっています。

近世の遺跡は、県庁舎建設にともなって大規模に発掘された湧田古窯跡が特筆されます。窯場で、平窯、土取り場、廃棄場、工房、生産物置き場、井戸などの遺構と瓦、窯道具を中心とする多彩な出土品の検出は、壺屋焼の伝統につながる17世紀の沖縄における窯業成立期の具体的な姿を明らかにしました。

近世から近代にかけての発掘では、古墓群の調査があります。北谷町、宜野湾市、那覇市、浦添市、久米島町などを中心にその発掘が実施され、墓の形態、蔵骨器、副葬品、人骨の研究が進展してきています。なかでも、那覇市の銘苅古墓群と久米島カンジン地区の洞穴風葬墓では大規模な調査と大量の蔵骨器、人骨が注目されました。

近代以降の戦争遺跡に関する調査も進められています。軍事施設だけでなく、住民の避難場所や、軍隊の施設ともなったガマと呼ばれる自然あるいは人工の壕・洞穴などを中心に、考古学的な手法による発掘がいくつか試みられています。

沖縄の原始～グスク時代の時期区分（編年）

段 階	社会と文化	遺跡のある場所	この時代に流行した 主 な 土 器 等	現行編年	高宮編年	日本	今からの 古 さ		
旧石器時代	未発見						10,000年前		
新 石 器 時 代	渡 来 期	(1)	北から縄文人が渡来 ある程度の居住活動 九州的文化	海岸地帯	爪形文土器	前葉 I期	草創期 早期 前 期	6,000年前 5,000年前	
		(2)	北から縄文人が渡来 九州的文化 個性化萌芽	海岸と台地崖下	条痕文土器 室川下層式土器 曾畑式土器	早期 中葉	II期	中 期	4,000年前
	適応期	一応適応に成功するが少数 個性的文化成立	海浜と台地崖下	面縄前庭式土器	後葉	前 III期	文 後 期	3,000年前	
	拡散期	本格的適応、島々に拡散 個性化さらに進む	台地崖下と海浜	仲泊式土器 伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	前 期	IV期	代 晩 期		
	発 展 期	(1)	人口増加と集落の形成	台地縁辺	カヤウチバンタ式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器	中 期	V期	前 期 中 期	2,000年前
		(2)	集落の発展と海洋への適応 貝交易の展開	海浜	大当原式土器 具志原式土器 アカジャンガー式土器	後 期	後 期 I期 IV期	弥生時代 古墳時代 平安時代	1,200年前
階級社会	農耕と鉄器の普及・海外交易 首長層の出現 グスクの形成と発達	小高い丘	カメヤキ グスク土器 貿易陶磁器	グスク時代		鎌倉時代 室町時代	900年前		

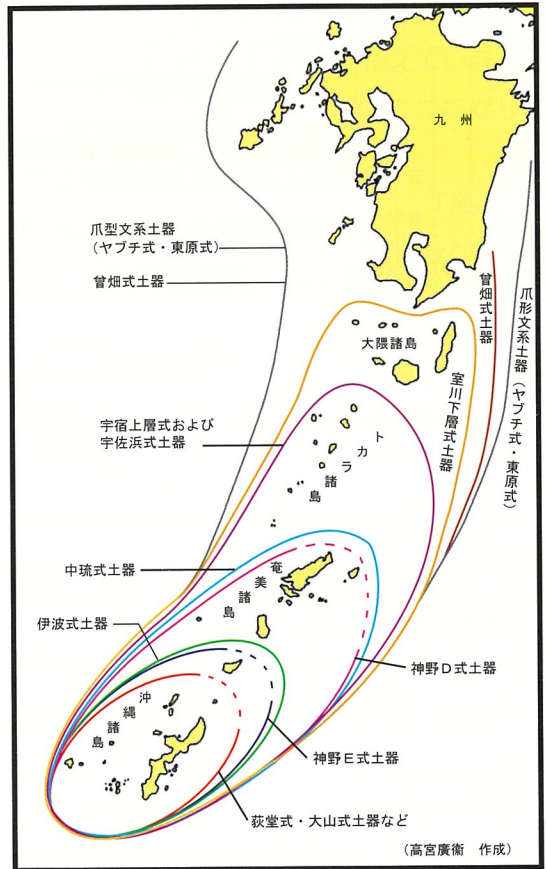
作成：安里嗣淳（沖縄県立埋蔵文化財センター所長） 2002年11月

沖縄貝塚時代早〜中期(縄文時代)

沖縄貝塚時代は、今から約6,500年前に遡ることが出来ます。沖縄貝塚時代早期の存在は、渡具知東原遺跡で初めて確認されました。さらに、九州縄文土器や、九州産の黒曜石を用いた石鏃などの出土遺物から、沖縄本島および周辺地域における"九州縄文文化の影響"のあったことがわかります。一方で、宮古・八重山諸島では九州縄文文化の影響は見られず、異なる文化が存在していました。しかし、九州縄文の影響が見られた地域でも独自の縄文文化へと変容し、約3,500年前頃の伊波式・荻堂式土器は、沖縄独特の土器とされています。室川貝塚出土の土器から3つの土器型式が設定され、沖縄縄文時代の土器編年の上で成果を挙げています。

出土した多くの遺物から、当時の人々が狩猟採集の生活のなかで様々な道具を作り出していたことがわかります。土器や石器のほか、チャートや黒曜石で作った矢じりなどが見つかっており、弓矢が狩猟具として存在していたと考えられています。また、獣骨や貝などからは、針やおもりなどの実用品のほか、かんざしや小玉といった装飾品などを作り、身を飾りました。具志川島遺跡群で発見された貝輪を着装した人骨などから、その様子がうかがえます。

また、住居については、地面を掘りくぼめた竪穴住居が一般的でした。現在、沖縄で最も古い住居跡は、古我地原貝塚から見つかった約4,000年前のもので、さらに、仲原遺跡などでは何軒かまとまった集落跡として確認されています。食べ物に関してはイノシシや魚類、貝類の他、湿地帯遺跡である前原遺跡の発掘調査により、大量のシイ・オキナワウラジロガシの実などが竹製ザルに収められた状態で検出され、これまで様相が不明であった植物質遺存体の状況が確認されたのです。



土器の島嶼化

具志川島遺跡群で発見された貝輪を着装した人骨などから、その様子がうかがえます。



骨製品 (古我地原貝塚)



貯蔵穴 (前原遺跡 宜野座村教育委員会)



竪穴住居跡 (仲原遺跡)

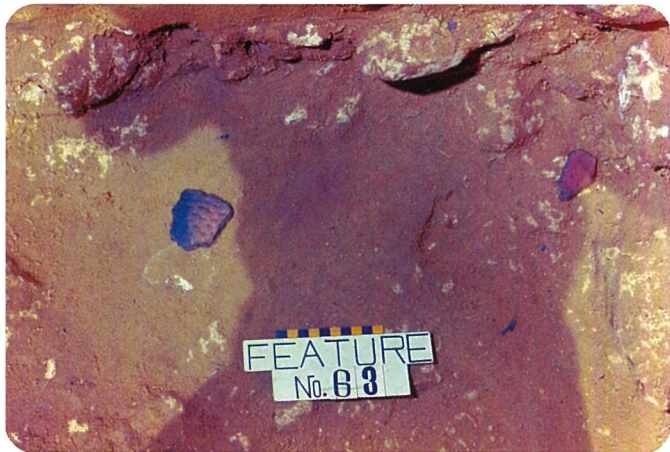
とぐちあがりばるいせき
渡具知東原遺跡

所在地：読谷村字渡具知小字東原
調査年：1975～77年
調査者：読谷村教育委員会
調査原因：道路建設

渡具知東原遺跡は、読谷村と嘉手納町の間を流れる比謝川の河口、北岸の低地にある沖縄貝塚時代早期（縄文時代早期末並行期）の遺跡です。1975年、九州縄文時代前期を代表する「^{そばたしきどき}管畑式土器」の発見により注目され、その後の調査により、さらに古い日本本土の縄文時代早期を代表する「^{つめがたもんどき}爪形文土器」が出土しました。

従来、沖縄は縄文時代後期(約3500年前頃)から始まったと考えられてきましたが、これらの発見により、さらに古い縄文時代早期末まで遡ることになりました。

また、ここで発見された「爪形文土器」の1つの型式が「東原式土器」として設定されました。



爪形文土器出土状況

管畑式土器出土状況



G-30グリット 北壁

約6,000年も遡った発見！

これまで、沖縄の縄文時代は約3,500年前の縄文時代後期に始まったと考えられていました。しかし、渡具知東原遺跡で今まで沖縄本島で出土していない異質な土器が発見されたことで大きく変わります。

1975年～1977年に読谷村教育委員会がおこなった発掘調査の結果、九州縄文時代前期を代表する「管畑式土器」が出土し、さらに下層から日本本土の縄文時代早期を代表する「爪形文土器」が発見されたのです。この発見によって、沖縄縄文時代は約3,000年もさらに遡り、約6,600年前も昔から始まったと考えられるようになりました。

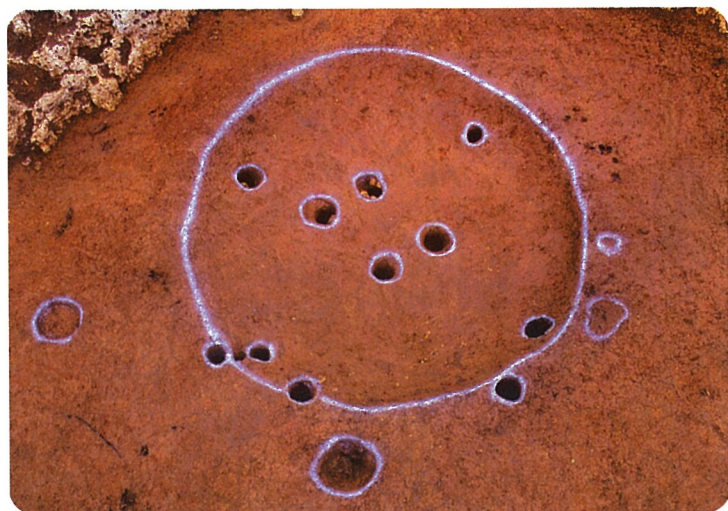
こがちばるかいづか
古我地原貝塚

所在地：石川市字伊波小字古我地原
調査年：1983・84年
調査者：沖縄県教育委員会
調査原因：沖縄自動車道建設

古我地原貝塚は、石川市の石灰岩丘陵のほぼ中央にある、沖縄貝塚時代早期後葉～前期（縄文時代中・後期）の貝塚です。

遺跡からは、現在のところ沖縄で最も古い住居跡じゆうきよあとが検出されています。出土遺物では、

実用品として骨製の針・錐・ヤス状刺突具などがあり、装飾品では、貝製小玉こつせいたれがざりや骨製垂飾の他、クジラやジユゴンの骨を利用した骨輪などがあります。また、多量に出土した土器は、沖縄本島の北に位置する奄美大島で多数発見されている土器と同系の土器がほとんどでした。従来、沖縄本島で発見されている土器でこの時期のものは少なく、また、これまで縄文時代中期については土器こそ発見されていたものの、どのような住居に暮らしていたかなどの文化内容は謎とされていました。その意味で、この遺跡は台地上で住居生活を営み、崖下に貝塚を形成するという生活内容の一端を知ることができる、大変重要な遺跡となりました。



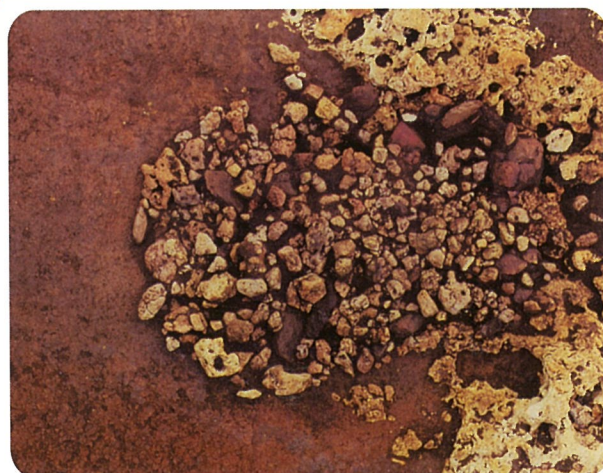
第2号遺構（竪穴住居跡）



面縄前庭式土器



出土した土器



第1号遺構

ひろかわかいづか

室川貝塚

所在地：沖縄市字仲宗根小字室川原
 調査年：1974・75年(第1次)、1975年(第2次)、
 1976年(第3次)、1977年(第4次)
 1978年、1986年(第1次)、1988年(第2次)
 1989・90年(第3次)
 調査者：沖縄国際大学考古学研究室(1974年～第4次)
 沖縄市教育委員会(1978年～第3次)
 調査原因：学術調査、範囲確認調査、総合庁舎建設



室川貝塚は、沖縄貝塚時代早期中葉～前期(縄文時代前期・後期)および、沖縄貝塚時代後期(弥生～平安時代並行期)の丘陵にある遺跡です。

この遺跡では、数回にわたる調査で多くの遺物が確認されていて、土器では、室川下層式・室川式・室川上層式の3つの土器型式が設定されました。また、荻堂式土器が伊波式土器より古いとされていたのが、室川貝塚において土の堆積状態が逆転することが確認され、沖縄の土器編年に大きく貢献しました。さらに、沖縄でつくられた土器以外にも南九州でつくられたと思われる土器も出土しており、日本本土との交流をかいま見ることができます。土器の他には、骨・貝製の装身具や貝輪、貝玉といった当時のファッションが想像できる遺物や骨製のおもり錘・針・錐といった生活遺物も発見されています。



荻堂式土器



S-7グリット 北壁



中央区発掘の様子



獣形骨器

(写真提供：沖縄国際大学)

なかばるいせき

仲原遺跡 (国指定史跡)

所在地：与那城町字伊計小字仲原
 調査年：1980年(第1次)、1981年(第2次)、
 1988年(第3次)
 調査者：沖縄県教育委員会、与那城町教育委員会
 調査原因：土地改良、史跡整備

仲原遺跡は、与那城町にある伊計島の平坦な丘陵のほぼ中央部にあります。1980年の沖縄県教育委員会による発掘調査で沖縄貝塚時代中期(縄文時代晩期；約2,500年前)の竪穴住居址が確認されました。

その後2度の調査で、竪穴住居址は23棟を数え、当時の集落の様子が明らかになりました。

竪穴住居址は、掘った穴の縁に石灰岩を巡らせ、屋内には石組炉があるものや、粘土を貼り付けた床をもつものなどがあります。また、廃棄された住居に人を埋葬する廃屋墓が沖縄で初めて発見されました。これら住居跡からは、土器、磨製石斧や骨針などの実用的なものや、イモガイ製小玉、サメ歯製垂飾品などのアクセサリーが見つかっています。特に、土器は「仲原式土器」として沖縄における縄文時代晩期の指標となる重要なものです。このことから、仲原遺跡は1986年に国指定史跡となり、1996年には竪穴住居が復元され、史跡公園として保存整備されました。



15号住居遺構



復原集落



仲原式土器



各期における住居跡の変遷 (復原はIV期目を対象)

なかどまりいせき

仲泊遺跡 (国指定史跡)

所在地：恩納村字仲泊小字比屋根原
 調査年：1974年(第3貝塚)、1975年(第3貝塚)、
 1976年(石畳道、第2貝塚)
 1977年(第1洞、第4貝塚)
 調査者：沖縄県教育委員会、恩納村教育委員会
 調査原因：国道58号線拡張、史跡整備

仲泊遺跡は恩納村字仲泊比屋根原にある、
 沖縄貝塚時代前期～中期（縄文時代後期～晩
 期）および、沖縄貝塚時代後期（弥生～平安
 時代並行期）～グスク時代、近世にかけての
 遺跡で、主に崖下に遺跡が形成されています。

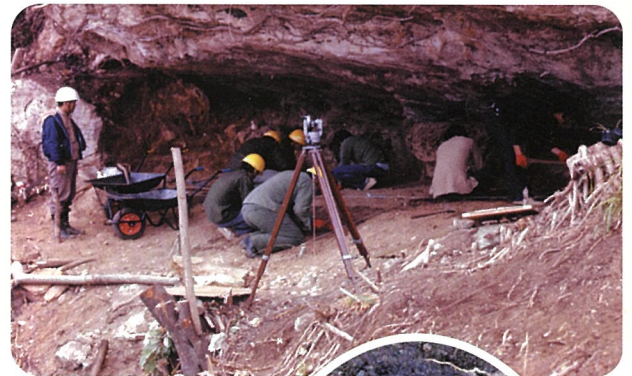
沖縄海洋博開催に向けた国道58号線拡張工事に伴い、1974～77年にかけて沖縄県教育委員会
 と恩納村教育委員会により発掘調査が行われました。

遺跡は第1洞穴遺跡、第2～5貝塚からなり、第3貝塚では岩陰を利用した住居址、第1洞穴遺跡、
 第4貝塚では敷石の住居址が確認されています。また、出土した土器のなかから面縄前庭式土器の
 流れを汲むひとつの土器型式として「仲泊式土器」が設定され、第2貝塚からは九州産の黒曜石が
 出土しました。

沖縄の先史文化を考える上で貴重であることから遺跡保存運動がおこり、記録保存のための調査
 から遺跡の性格を確認するための調査となりました。この成果をうけて、国道は本遺跡を迂回する
 ように変更されました。1975年には国指定史跡となり、遺跡の整備が行われました。



現在の仲泊遺跡遠景



第3貝塚発掘風景



遺跡保存運動



土器出土状況

くしかわじまいせきぐん

具志川島遺跡群 (伊是名村指定文化財)

所在地：伊是名村具志川島
 調査年：1975・76年(分布調査)、1976～78年(第1～3次)、
 1980年(第4次)、
 1989～92年(開発に伴う確認調査
 (第1次～第4次))

調査者：伊是名村教育委員会
 調査原因：重要遺跡確認調査、リゾート開発

具志川島遺跡群は、伊是名村具志川島にある岩立遺跡、
 岩立遺跡西区、親畑貝塚、西地点遺跡、南地点遺跡の
 5つからなる遺跡の総称で、沖縄貝塚時代早期中葉～
 後葉(縄文時代前期～中期)および、沖縄貝塚時代後期(弥生時代～平安初期並行期)にかけての
 遺跡です。

1976年以降、伊是名村教育委員会が中心となって調査が行われ、埋葬遺構や炉跡、沖縄や奄美系
 の土器・貝製品が発見されています。さらに、岩立遺跡から出土した土器が縄文中期を代表する
 「面縄前庭式土器」の先行型式とされ、「具志川式土器」と設定されました。

岩立遺跡における1978年の岩陰部の調査では、右腕に8個の貝製腕輪を着装した人骨が沖縄では
 初めて発見されました。また、それ以外の埋葬人骨の中にも骨化したあと改めて埋葬する「改葬」が
 なされた人骨も検出され、沖縄における葬墓制研究(死者の葬り方や墓の形状・形態)にとっても重
 要な資料となりました。

遺跡群の中の岩立遺跡と親畑遺跡は、1982年11月、村指定文化財となっています。



発掘の様子



炉跡



貝輪着装人骨アップ



1号人骨



貝輪着装人骨

(写真提供：伊是名村教育委員会)

めーばるいせき
前原遺跡

所在地：宜野座村字松田小字前原
調査年：1996・97年
調査者：宜野座村教育委員会
調査原因：県道整備

前原遺跡は、太平洋に面する石灰岩地帯の一角に立地し、近くには宜野座福地川が流れ、沖縄貝塚時代早期中葉・前期（縄文時代前期・後期）～グスク時代の遺跡です。



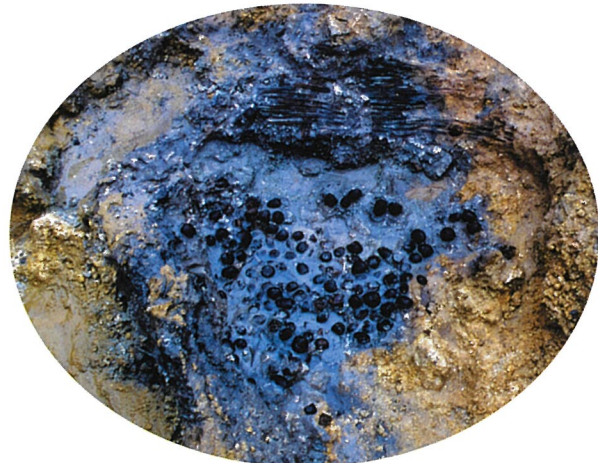
調査地は、太平洋に面する東西を標高約7mの石灰岩丘陵に囲まれた窪地となっており、出土遺物は、土器をはじめとして、石器、木製品、貝製品、骨製品などが出土しています。

遺構では、掘込墓、石列遺構、溝状遺構、畑状遺構、水場遺構、貯蔵穴などが検出されました。

その中でも特に標高0m～-1mから検出された水溜め遺構では、沖縄で初めて丸木舟の舳先^{へさき}が出土し、縄文時代にも舟が使用されていることが分かりました。また、貯蔵穴からは県内初のバーキ（竹製籠）が13点出土しました。中にはオキナフウラジロガシを主とした果実や種子などが入った状態で検出されたものもあり、植物食料の保存と輸送を考えるうえで貴重な資料となっています。



水溜遺構出土の舟の舳先



1号貯蔵穴検出状況



7号バーキ検出状況



22号貯蔵穴検出状況

なぜ、前原遺跡では木の実やカゴがのこっていたの？

木の实やカゴは標高0m～-0.5mから検出された貯蔵穴から出土しました。そこでは地下水が豊富に湧き出し、また、海水が干満によって入り込む環境にありましたので、貯蔵穴は木の実に含まれる渋抜きと保存の役目があったと考えられます。

そのような常に水に浸っている低湿地では、水が空気を遮断します。すると、動物、菌類やバクテリア等の植物を分解する生物に必要な酸素の供給を絶つので、普通には残りにくい木の实やカゴ等の植物遺存体が残るのです。

(写真提供：宜野座村教育委員会)

沖縄貝塚時代後期（弥生～平安時代並行期）

沖縄貝塚時代後期は、本州の弥生時代から平安時代にかけての時期にあたります。この時期は、縄文時代に引き続き狩猟採集の生活が営まれていました。

沖縄貝塚時代後期の土器編年は、これまでの調査成果から明らかになりつつあります。また、1963年に伊江村の具志原貝塚で初の弥生土器が確認された以降、40余りの遺跡から弥生土器が出土・確認されました。特に本部町の具志堅貝塚や浦添市の嘉門貝塚では、弥生時代前期～中期の土器が中心に出土しています。また、その他にも宇堅貝塚群の鉄斧、漢式三角鏃、遺構では読谷村の渡具知木綿原遺跡で、本土弥生文化の影響と考えられる箱式石棺墓がみつかっています。

この時期は九州との交流が盛んであり、特に九州で珍重された貝輪を介して沖縄と九州の交流が行われていました。この取引用のストックと考えられるものが具志原貝塚などで確認されているイモガイやゴホウラの集積です。貝製品も豊富で、久米島町の清水貝塚ではヤコウガイ製匙や貝符が出土し、貝の文化が盛んであったことを示しています。

弥生文化の特徴は水稲耕作とされますが、現在のところ沖縄諸島では弥生時代の水田は確認されていません。しかし、この時期の末頃になると、宜野湾市の伊佐前原第1遺跡などから畑の跡が確認されるなど、農耕が開始されていたことが判明しつつあります。

弥生文化の影響と沖縄の先史文化

日本における縄文文化は狩猟採集の生活を中心として、土器は装飾性が高い点が特徴とされています。これに対して弥生文化の特徴は水稲耕作とされ、土器は簡略化するとされます。

沖縄の先史時代は貝塚の形成が特徴的であることから「貝塚時代」ともよばれ、本土の縄文時代～平安時代までの長期間にわたります。この時代は狩猟採集の生活が営まれたと考えられています。本土で弥生時代にあたる時期になっても沖縄では水稲耕作が行われていた痕跡は発見されていません。

また、本土では弥生時代になると大陸から人々が渡ってきたため、ヒトの形質が変化したと考えられていますが、沖縄では縄文時代からの形質を持つ人々が引き続き活動していたとされています。

しかし、現在では、沖縄の40余の遺跡から南九州を中心とした弥生土器が確認され、九州へ運ぶためのイモガイやゴホウラをストックしたと思われる集積が確認されていることから、弥生時代の九州とは盛んな交流がなされていたと考えられています。

ぐし ばる かい づか 具志原貝塚 (国指定史跡)

所在地：伊江村字川平小字具志原
 調査年：1963年(学術調査)、1984・85年
 (採砂工事)、1995年(道路建設)
 調査者：琉球大学、伊江村教育委員会、
 沖縄県教育委員会
 調査原因：学術調査、採砂、道路建設



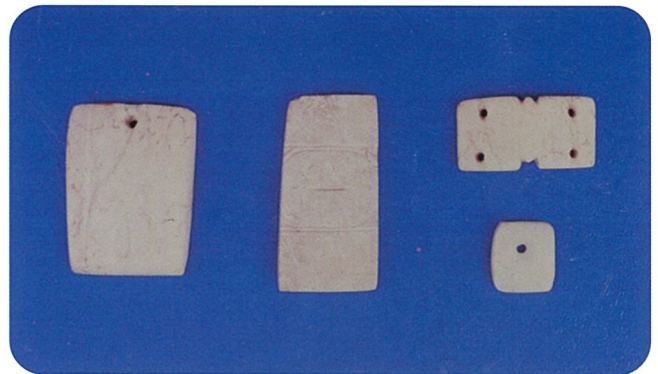
具志原貝塚は、伊江港の北側にある砂丘地にある、沖縄貝塚時代後期前半(弥生時代並行期)を中心とする貝塚で、下層からは、沖縄貝塚時代早期中葉(縄文時代前期)の文化層も確認されて

います。1963年に行われた琉球大学の発掘調査において、沖縄県内で初めて九州からもたらされた弥生土器(須久式・山ノ口式)が発見され、その後の調査で宇堅貝塚に続いて免田式土器も見つっています。貝匙や貝輪などの多数の貝製品や、イモガイの集積や、住居跡などの遺構も検出されました。特に、イモガイの集積は7基検出され、九州弥生社会との交易に備えたストックと考えられています。さらに、弥生土器を模倣した在地土器や、貝製品、石器などが出土し、焼き火跡も検出されました。

また、尖底土器の多く出土した南側がくびれ平底土器の多く出土した北側より古いと考えられています。遺跡の端の方から、埋葬人骨も見つかり、1986年に国指定を受け保存されることになりました。



4号イモガイ集積遺構



貝符



免田式土器



貝集積遺構 (イモガイ・マガキガイ)

沖縄貝塚時代後期(弥生〜平安時代並行期)

とくちもめんばるいせき 渡具知木綿原遺跡 (国指定史跡)

所在地：読谷村字渡具知小字木綿原
調査年：1977年
調査者：読谷村教育委員会
調査原因：採砂

渡具知木綿原遺跡は、沖縄貝塚時代前期～後期前半（縄文時代後期～弥生時代並行期）にかけての遺跡で、読谷村の西海岸、東シナ海に面した砂丘上にあります。

調査は、弥生文化の影響のもとにつくられたと考えられる箱式石棺墓が7基確認されるという極めて重要な発掘調査でした。石棺は板状の石灰岩を組み合わせたもので、最も大きなものは長さが約180cmもあります。出土品としては、土器、石器、貝製品や、弥生時代前期に属する弥生式土器、玉などがあります。

人骨は十数体分が確認されており、顔の特徴は縄文人に似ているが、独自性が強いとされています。

調査は、採砂工事に伴う緊急発掘調査として始まりましたが、箱式石棺墓は沖縄県内では初の確認であったことから、1978年に国指定の史跡となり保存されています。



5号箱式石棺墓



3号人骨の足部

(写真提供：読谷村教育委員会)

しみず かいづか 清水貝塚

所在地：久米島町字鳥島小字清水原
調査年：1985年
調査者：具志川村教育委員会
調査原因：土地改良

清水貝塚は、久米島の南西海岸の砂丘にあります。1985年の土地改良事業に伴い、具志川村(現久米島町)教育委員会による発掘調査が行われ、沖縄貝塚時代後期前半(弥生~古墳時代並行期)の貝製品や多量の土器が確認されました。

この貝塚は大きく上層と下層に分けられ、層ごとに出土遺物の特徴があります。土器の大半は貝塚周辺で作られたものですが、九州の弥生土器もごく少量ですが、出土しています。土器の特徴では、上層には文様がないものが多く、下層には突帯文とつたいもんという文様が見られるといった違いがあります。

また、貝製品にはゴホウラなどの貝輪や、イモガイ製貝符、ホラガイ製容器、ヤコウガイ製貝匙、シャコガイ製貝斧があります。特に貝符は、従来沖縄で出土していた簡易な線刻による文様をもつ種子島広田遺跡上層タイプが上層から、浮き彫りの華麗な文様の広田遺跡下層タイプが下層から出土しました。貝符の新旧が沖縄でも確認できたことは、重要な成果です。



沖縄貝塚時代後期(弥生~平安時代並行期)



上層(II層)出土の貝符



貝匙出土状況



下層(IV層)出土の貝符



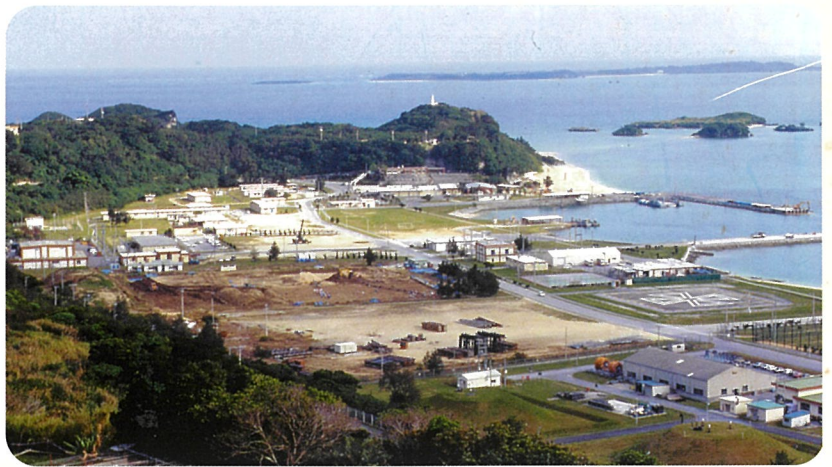
ヤコウガイ製貝匙

(写真提供：久米島町教育委員会)

へしきや 平敷屋トウバル遺跡

所在地：勝連町字平敷屋小字板武座原
調査年：1992～94年
調査者：沖縄県教育委員会
調査原因：倉庫建設

平敷屋トウバル遺跡は、勝連半島の先端にある米軍基地内の中城湾に面した低砂丘地にある、沖縄貝塚時代前期（縄文時代後期）～グスク時代にかけての長期にわたる遺跡です。



調査の結果、沖縄貝塚時代後期の層ぼったてばしらたてもから多数の柱穴が確認され、平地式の掘建柱建物があったことが確認されています。その他にもイモガイ集積などが確認されています。

土器は多量に出土し、特に大当原式土器うみどうばるの代表的な遺跡とされており、九州の土器の影響を受けたと考えられる土器も出土しています。その他にも、石器や骨器、豊富な貝製品がありイモガイやゴホウラの貝輪などの装飾品や、貝刃かいじん、貝匙などの実用品が出土しています。さらに開元通宝いげんつうぽう、青銅製の鐺などの移入文物が出土していることから、沖縄本島東海岸の中心的な遺跡であり、広い地域との交流がなされていたと考えられています。



調査区全景



イモガイ集積



イモガイ製品



出土した土器

沖縄貝塚時代後期（弥生～平安時代並行期）

う けんかいづかぐん
宇堅貝塚群

所在地：具志川市字宇堅小字岩地原
調査年：1979年、1989・90年
調査者：具志川市教育委員会
調査原因：土地改良、火力発電所建設

宇堅貝塚群は、宇堅集落東方の海岸砂丘地にある沖縄貝塚時代後期前半（弥生時代並行期）の遺跡です。一帯は採砂工事や米軍施設工事により遺跡の一部が破壊されていました。遺跡の一部では、弥生土器（須久式・山ノ口式）やそれらを模倣した土器などが集中的に出土しています。また、土器のほかに鉄斧と砥石、ガラス小玉も検出され、当時の沖縄と九州の交流を考える上で重要な遺跡であることが分かりました。

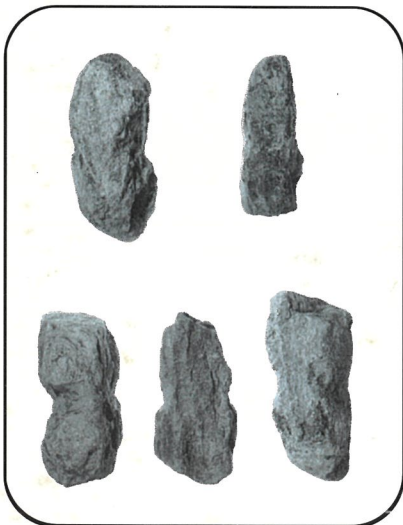
その後の調査で従来の須久式・山ノ口式の他に、免田式や入来式などの九州の弥生土器や、ゴホウラとイモガイの集積、柱穴等の遺構が確認されました。また、遺物では弥生土器や貝輪のほか、鉄斧、県内では初めての漢式三角鏃、後漢鏡等も出土し、全国的にも出土例の少ない資料となっています。



鉄斧出土状況



貝溜まり



石器



弥生系土器

(写真提供：具志川市教育委員会)

グスク時代

グスクが展開した時代を、沖縄の考古学ではグスク時代として区分しています。それまでは、奄美・沖縄・先島の三つの文化圏に分かれ、それぞれが固有の文化を展開していた南西諸島全域が、初めて同一の文化圏を形成した時代です。

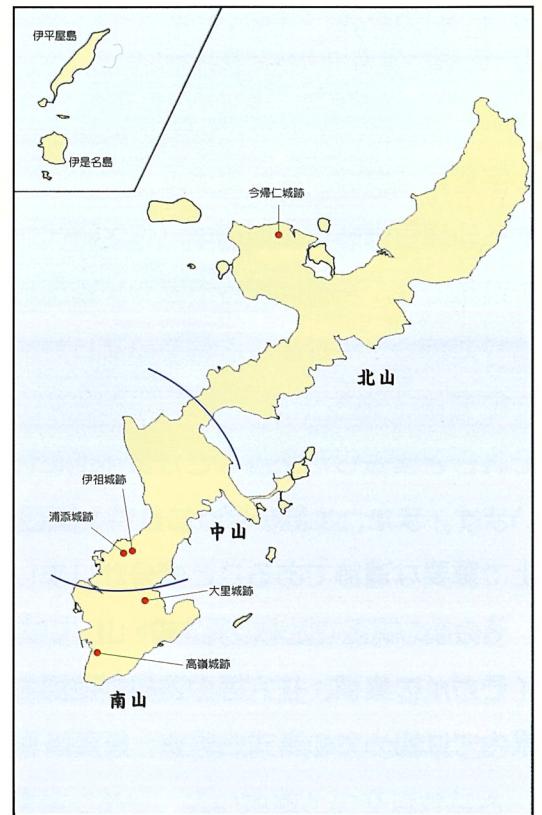
時期的には、概ね12世紀前後から16世紀前半頃まで、日本史上では平安時代後期から、鎌倉・室町時代にかけてであり、中世に相当する時代です。

往時の琉球社会は、農業と貿易で得た富を基盤として支配者(=按司)が各地に出現し、互いに貿易の利権や支配の拡大をめぐる争った国家の胎動期です。

琉球の按司は、日本中世社会の地方領主に相当し、明国からは賚官、村人からは「世の主」または「テダ(太陽)」と呼ばれていました。各按司は、支配の拠点であるグスクを築き、東アジアおよび東南アジア諸国との貿易によって得た陶磁器や鉄などの文物(富)を基盤に、農具を鋳造して農業生産の向上に努めるとともに鉄製武器を入手して武力を強化し、勢力拡大に力を注いできました。

とりわけ、今帰仁城跡や勝連城跡、首里城跡などの琉球王国の形成、統一王国後の王宮跡などにおいては、中国産陶器を中心とした国内外の陶磁器を主に各種の文物が多量に出土しています。また、宜野座村の漢那ウエーノアタイ遺跡では鍛冶^{カシ}関連の遺物が多量に出土しており、農具などを鋳造した遺跡として捉えられています。

このような社会背景から考えてみると、多くのグスクは胎動期の争いの拠点(=指揮本部)とみなすことができ、その構造など詳しく観察すると防御や自衛、攻略等に対する工夫が執拗なまでに懲らされていると読みとれます。グスクは、琉球の社会が統一国家へ向かう時代の緊張関係の中で形成された歴史的記念物です。



三山の領域



今帰仁城跡

いなふくいせき

稲福遺跡

所在地：大里村字大城小字稲福原
調査年：1969～74年、1981・82年
調査者：琉球大学考古学研究会、
沖縄県教育委員会
調査原因：学術調査、建物改修

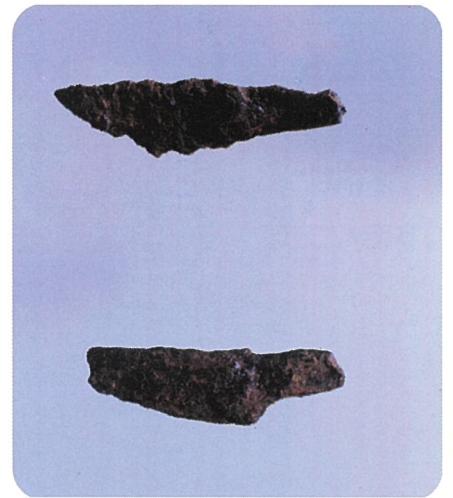
稲福遺跡は、大里村字大城稲福原にあるグスク時代の遺跡で、上御願、稲福の殿、仲村御嶽の3つの拝所に囲まれた地域を範囲とします。平面形は三角形状を呈し、そのうち2方は崖に囲まれています。また、上御願は標高170mを越す石灰岩丘陵にあり、山グスクとも呼ばれています。

調査の結果、上御願では住居跡や倉庫跡と考えられる柱穴群、土壇、鍛冶場跡等が検出されました。出土遺物としては、グスク系土器をはじめとして陶磁器、カムイヤキ、鉄製品、青銅製品、玉類、石器等の日常用品や武器、祭祀用品といった多種多様なものがあります。

稲福遺跡の発掘調査により、グスク時代の社会や集落形成過程に関する貴重な基礎資料が得られました。



第2号土壇



ヤリガンナ



鉄鋌



鉄斧

グスク時代

しゅりじょうあと
首里城跡

所在地：那覇市首里当蔵
調査年：1973年～現在
調査者：沖縄県教育委員会
 沖縄県立埋蔵文化財センター
調査原因：復元・公園整備

那覇市首里の丘には、15世紀～19世紀後半まで琉球王国の王府「首里城」がありました。正殿などの建物は去る沖縄戦で破壊され、その後の琉球大学建設などで石垣や遺構などもかなり破壊を受けました。



(写真提供：国営沖縄記念公園事務所)

首里城跡の復元・整備のため、日本復帰直後から現在まで、30年にわたって遺構発掘調査が進められています。これまでの調査では、城の中心であった正殿や祭祀が行われた京の内跡などで重要な遺構、遺物が確認されています。日本・中国・朝鮮・東南アジアなど各地からもたらされた陶磁器類などの遺物は、日本本土でもあまり発見されていない貴重なものもあります。2000年には京の内跡から出土した陶磁器が国の重要文化財として指定されました。

沖縄の歴史を語る上で重要な遺跡である首里城跡は、今後も発掘調査を行っていく予定です。



京の内跡出土陶磁器（重要文化財）



正殿跡



京の内跡全景

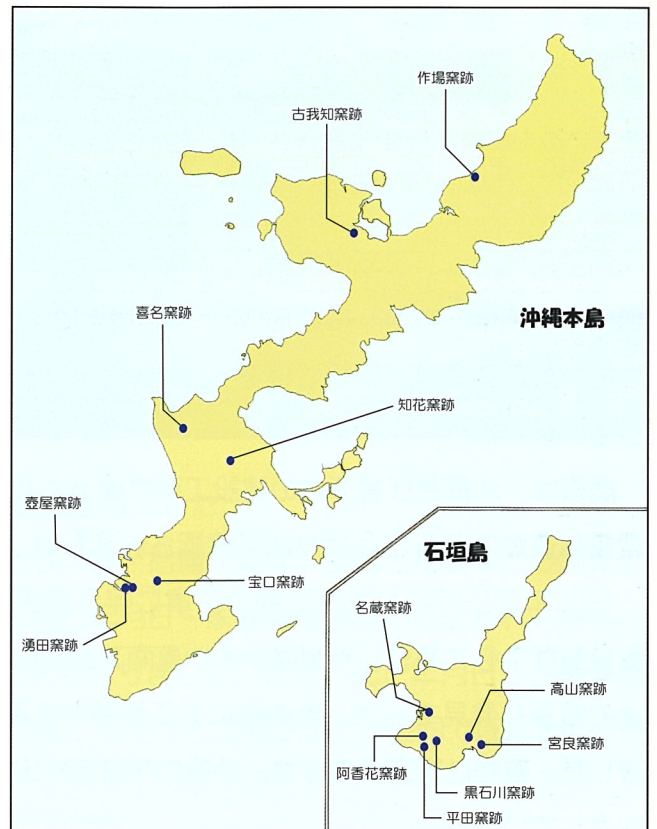
近世・近代

遺跡の発掘調査というと、縄文時代などの古い時代が対象となっているイメージがありますが、新しい時代でも文献には記されていない事柄が発掘調査により判明するということもあります。県内では、琉球王国時代以降の墓や、沖縄戦における戦争遺跡調査がおこなわれています。

県内における近世以降の遺跡調査は、墓を中心としており、特に那覇市の銘苅古墓群では近世の墓が多数確認され、墓制を考える上で貴重なものです。その他にも久米島町のヤッチのガマや浦添市伊祖のいそいりごはいりょうばか入め御拝領墓などの調査でも、多くの成果があがっています。

窯跡の調査では、那覇市の湧田古窯跡で窯体が確認され、窯業の開始を考える上で重要な発掘調査結果が得られました。同じく、那覇市の壺屋古窯群、石垣市の名蔵窯跡などでも調査が行われ、沖縄における窯業の変遷が明らかになりつつあります。

戦争遺跡の調査は、これまでの聞き取り調査や戦争記録などにもとづく調査だけではなく、戦争遺跡という観点から戦争を考える「戦跡考古学」の成果として全国的に注目されています。このような中で、1998年から本格的に戦争遺跡の詳細分布調査が行われています。



主な古窯跡分布図

湧田古窯跡

所在地：那覇市泉崎
 調査年：1986・87年(行政棟)、
 1989・90年(議会棟)、
 1990・91年(警察棟)、
 1994・95年(地下駐車場)
 調査者：沖縄県教育委員会
 調査原因：県庁舎等の建設



湧田古窯跡は、那覇市泉崎、現在の沖縄県庁敷地一帯に形成された窯の跡で、17世紀に操業していました。

調査は、沖縄県庁舎ほかの建設工事に伴って1986～1995年にかけて行われ、沖縄の窯業を知るうえで貴重な遺跡であることが改めて確認されました。

1986年から行われた行政棟の工事に伴う調査では、平窯の窯体を確認しました。現在の沖縄では登り窯が中心であり、平窯は中国や東南アジアにみられることから、沖縄における窯業の歴史を考える上で貴重な発見でした。その他にも工房跡や土取場跡を確認し、当時の窯場の様子を知ることができました。遺物は窯道具のほか、多量の陶磁器が出土し、日本、中国だけではなく東南アジアの陶磁器も出土しています。

現在、1号窯は県立博物館に保管され、2号窯是那覇市の壺屋焼物博物館に展示されています。



坩堝



発掘状況



2号窯



I地区の瓦列遺構

めがるこぼぐん
銘苅古墓群

所在地：那覇市銘苅
 調査年：1987～89年(分布・試掘調査)
 1990～96年(南地区)
 1992～2000年(北地区)
 調査者：那覇市教育委員会
 調査原因：土地区画整理



銘苅古墓群は、那覇市字銘苅にある15世紀以降に造られた墓地で、10万㎡以上の範囲が調査されました。墓地は大きく南側（銘苅川・大湾川流域）と北側（多和田川流域）に分かれ、川岸の琉球石灰岩斜面・崖下に造られた亀甲墓・掘込墓など約300基が確認されました。

墓の中には、遺骨を納める石製・陶器製の蔵骨器があり、簪そうこつき・指輪かんざし・煙管きせる・食器・花瓶などの副葬品もありました。蔵骨器には銘書めがち（亡くなった人の名前・死亡年月日・家族関係など）が記されており、調査の結果、銘苅古墓群は首里系・那覇系の土族の墓だとわかりました。また、死亡年月日から蔵骨器の製作年代が判明し、銘書と家譜（家系図）が一致するなど、考古学と文献史学とが協同で成果をあげた貴重な遺跡です。



4号墓 人骨検出状況



青花壺



蓋に記された銘書



32号墓 厨子甕



陶製軒付甕形蔵骨器

(写真提供：那覇市教育委員会)

せんそう いせき ぶんぷ ちょうさ
戦争遺跡分布調査

所在地：沖縄全域
調査年：1998年～現在
調査者：沖縄県教育委員会
調査原因：遺跡確認詳細分布調査

戦争遺跡とは、近代以降の戦争（沖縄県においては特に沖縄戦）と、その遂行過程の中で、戦闘や事件の加害・被害に関わって沖縄県内で形成され、かつ現在に残された構造物・遺構や跡地のことを指します。

復帰前から沖縄の戦跡に対する関心は高いものがありましたが、戦争遺跡をどのように文化財として調査・研究するのかという検討は必ずしも充分ではありませんでした。

このような現状認識をふまえ、戦争遺跡の調査・研究の模索を含めた事業として、平成10年度より文化庁の補助を受けて、戦争遺跡詳細分布調査が開始されました。これは、県教育委員会が調査主体となり、県内全域を調査対象地域とするものです。

これまでの調査において、本島中南部に所在する548ヶ所の戦争遺跡が確認されました。

なお、今年文化庁は、県内における近代遺跡（軍事に関する遺跡）のうち、「地域別詳細調査対象物件」として『旧海軍司令部壕』（豊見城市）及び『南風原陸軍病院壕群』（南風原町）を選定しました。



旧海軍司令部壕（豊見城市）



大城の銃眼（北中城村）



南風原陸軍病院壕群（南風原町）

先島

南琉球圏にあたる先島諸島も先史時代は沖縄諸島と同じように狩猟・漁労・採集の生活を基盤としていました。先島諸島では、東南アジアの影響を受けたような土器や石斧・貝斧などが出土するため、文化的には沖縄諸島とはあまり関連せず、東南アジアなどと関係の強い独自の文化を形成していました。

八重山諸島における編年は現在までいくつか作られてきました。最初に作られた編年に早稲田大学八重山調査団による早稲田編年があり、Ⅰ期～Ⅳ期（先史～近世）に分けられていました。

しかし、1978年の神田貝塚おたばると大田原遺跡しもたばるの発掘でⅠ期（無土器時代）とⅡ期（下田原土器時代）の逆転が確認され、土器のあった時代の次に土器の無い時代がくるという特異な状況が確認されました。また、1983年の下田原貝塚おどまりはまと大泊浜貝塚の発掘調査でも同様な状況が確認されました。

ここ10年の発掘では下田原貝塚出土の土器を指標とする「下田原式土器」に、添道遺跡や、ピュウツタ遺跡から多少異なったタイプが出土するなど、そのバリエーションや編年に関する貴重な資料が得られています。

また、浦底遺跡では焼け石の集積遺構が多く検出されており、南方で見られるような石蒸し料理（ストーン・ボイリング）が行われていたと考えられています。

その独自の生活文化を続けていた先島諸島も15世紀末には琉球国の支配下に組み込まれていきます。



下田原式土器（下田原貝塚）



100号集石遺構（浦底遺跡 城辺町教育委員会）

先島の考古学編年

早稲田編年

編成	遺跡名	遺物
第一期	仲間第一(西表)	石器(磨製・半磨製)
第二期	下田原(波照間) 仲間第二 大原川付近小貝塚(西表)	土器(少量)・石器 貝器・骨角器
第三期	山原(石垣) 平西(西表) フルロウ山(小浜) フルスト原(石垣) 波照間貝塚群	土器(外耳多量・磁器・その他) 鉄製品・石器・貝器・骨角器
第四期?	大原(西表) 野底(〃) 川平第一(石垣) 川平第二(石垣) 川平第三(石垣) 名蔵川(石垣) 黒島	土器(ハナレ系?磁器・その他)・ 鉄製品

注： 左の早稲田編年のうち
第一期と第二期は、研究
の進展により順序が逆転
することとなった。

南琉球圏(宮古・八重山)新石器時代の編年

		安里嗣淳(1993年)										
		高宮廣衛 (九九六五)	金城亀信 (九九四三)	金武正紀 阿利直治	時代を示す 共伴遺物 (外来品)	土器 (在来品)	石器	焼石遺構 焼石・ 焼石(例はあ り)	貝殻や 獣骨	遺跡の 立地	時期区分	石器の 技術段階
仲間第一貝塚文化 (無土器文化) ↓ 名蔵貝塚文化 (貝斧) 仲間第一貝塚文化 (石斧)	下田原貝塚文化 (有土器文化) (仲間第二式土器) 下田原式土器 ↓ ? 	(参考) ¹⁴ C3970±95 ↓ ¹⁴ C3580±65	下田原期	(参考) ¹⁴ C1770±70 ↓ 12世紀前半	無土器期	下田原式土器 スライガイ突起部加工品 サメ歯製品	多い 半磨製・局部磨製が多い 比較的扁平で、小型が つ	不明(焼石を伴う例はあ り) 大量の遺構	比較的少量 貝殻が多量で、貝塚を 形成することが多い	海岸に近い低地石灰岩地 帯の赤土台地や、礫層な どの赤土台地に多い	前期 ↓ 後期	新石器時代
						無土器 スライガイ突起部加工品 サメ歯製品 貝斧(一部遺跡では大量 出土) 玉縁口縁の白磁碗 須恵器 滑石製石鍋 開元通宝(銭貨)	前期に比較して研磨面や や拡大、ていねいな仕上 げ、大型化の傾向 断面方形片刃石斧まれに 伴う	焼石顕著、一部遺跡で 大量の遺構	海岸に近い砂地に多い			

金武正紀・阿利直治・金城亀信の編年試案

編年		土器	石斧・貝斧	陶磁器・開元通寶	立地・石垣	主な遺跡	
先史時代	下田原期	(参考) ¹⁴ C3970±95 ↓ ¹⁴ C3580±65	下田原式土器	石斧	無し	砂丘背後の微高地	下田原 仲間第二 大田原
	無土器期	(参考) ¹⁴ C1770±70 ↓ 12世紀前半	無し	石斧 貝斧	開元通寶 中国陶磁器(北宋末)が僅かに出土 徳之島カムイ須恵器	砂丘	仲間第一 大泊浜 崎枝赤碕
歴(原)史時代	新里村期	12世紀 ↓ 13世紀	新里村式土器 ピロースク式土器	石斧僅か	中国陶磁器(北宋末~南宋)が少量 出土	丘陵上や平野 石垣無し	新里村東 ピロースクの2・3層
	中森期	13世紀末 ↓ 17世紀初	中森式土器	無し	中国陶磁器(元~明)が大量出土	石垣が登場	鳩間中森 新里村西
	パナリ期	17世紀末 ↓ 19世紀初	パナリ焼	無し	湧田・壺屋陶器や八重山陶器が出 土	近世の廃村や現村落	新城島

浦底遺跡

所在地：城辺町字福里小字浦底原
調査年：1987・88年
調査者：城辺町教育委員会
調査原因：道路建設

浦底遺跡は、砂丘にある南琉球新石器時代後期の集落遺跡で、当時の生活痕跡を良好に示している遺跡として注目されます。

遺物では、シャコガイ製貝斧が最も多く、大小様々なものや、製作過程を示す破片も出土しています。貝斧は、南太平洋諸島から東南アジア島嶼部にかけてみられる南方系文化ですが、浦底遺跡の貝斧は他の南琉球の同類遺跡と同じようにすべてフィリピン型です。

骨製品では骨針や^{へら}筥状製品、^ばサメ歯有孔製品が、石器は石斧などがわずかながら出土しています。また、土器が全く出土しておらず、これは八重山を含め、先島諸島におけるこの時代の特徴となっています。

遺構では、焼けた石が円形状に集まった集石遺構が数十ヶ所も発見され、いわゆるストーン・ボイリングと呼ばれる調理の跡だと考えられています。



調査区遠景



貝斧出土状況



遺構検出状況

(写真提供：城辺町教育委員会)

そえどう いせき
添道遺跡

所在地：多良間村字塩川小字添道原
調査年：1991年(試掘調査)、
1993年(第1次)、
1994・95年(第2次)、
1995年(第3次)
調査者：多良間村教育委員会
調査原因：重要遺跡確認調査

添道遺跡は、多良間島北側の砂丘地帯にある南琉球新石器時代前期の遺跡です。

調査の結果、^{れきじき}礫敷遺構が検出され、遺物では、土器や石器(たたき石、磨製石斧)、貝製品などが出土しました。

特に土器については、「下田原式土器」と呼ばれる八重山地域最古の土器が出土しており、宮古諸島としてこの頃の遺跡が初めて確認されました。これまで、貝斧を出土する南琉球新石器時代後期の遺跡が最古だと考えられていた宮古諸島の歴史が一気に前期まで遡ることになり、約3,800年前の古さをもつことが分かりました。しかし、宮古本島については、前期の遺跡はまだ確認されてなく、今後の発見が期待されています。



石器の出土状況



礫敷遺構



下田原式土器・石器



下田原式土器の出土状況

いせき ピュウツタ遺跡

所在地：石垣市字川平小字ヒウツタ^{かひら}
調査年：1995年
調査者：石垣市教育委員会
調査原因：遺跡範囲確認調査

ピュウツタ遺跡は、石垣市字川平の臨海砂丘地にある南琉球新石器時代前期の遺跡です。

「下田原式土器」が表面採集されたことや、隣接遺跡として無土器時代のピュウツタ川河口遺跡があることから、1995年に遺跡の性格及び範囲確認を目的とした調査が行われました。

調査の結果、岩石を円形に配した円形石列遺構が1基検出されていますが、性格等は分かっていません。地層の層序は地山^{じやま}を含め6枚確認されており、注目されるのは未攪乱^{みかくらん}の遺物包含層であるⅢ層（約4,200年前）とⅤ層（3,800年前）の間に無遺物層のⅣ層を挟んでいることです。Ⅲ層、Ⅴ層からは下田原式土器に属する土器が出土していますが、タイプの異なった文様が施されています。そのことから下田原式土器のバリエーションや編年に関する貴重な資料となっています。

その他の遺物として石斧等の石器がありますが、貝製品や骨製品及び食料残滓^{ざんし}と思われる獣魚骨類^{じゅうぎょこつるい}や貝類は得られていません。



円形状石列遺構



C-1グリット 南壁



土器

大田原遺跡・神田貝塚

所在地：石垣市字名蔵小字大田原
調査年：1978、1980・81年(大田原)
1978年(神田)
調査者：沖縄県教育委員会
調査原因：道路改良、土地改良

大田原遺跡は南琉球新石器時代前期、
神田貝塚は南琉球新石器時代後期の遺跡
です。

大田原遺跡は、名蔵湾に面する舌状に
突出した丘陵の先端（海拔9m）に、神田
貝塚はその南下の砂丘（海拔3m）にあり

ます。大田原遺跡では、石器とともに下田原式土器が出土しました。一方、神田貝塚では、遺物の大部分を石器が占め、土器は1点のみの出土でした。

当時、八重山諸島の編年は、1958年の早稲田大学八重山調査団の調査成果をもとに作成された「早稲田編年」が使われていました。早稲田編年の第Ⅰ期は土器が無く、石器や貝斧を使用していた時代で第Ⅱ期は石器とともに土器も使用していた時代と考えられていました。しかし、大田原遺跡と神田貝塚の発掘調査で、大田原遺跡の包含層が神田貝塚の包含層の下に入り込むことが確認されました。その結果、早稲田編年の第Ⅰ期と第Ⅱ期が逆転する^{ほうがんそう}という事が分かり、八重山の編年に大きく寄与しました。



石器出土状況（神田貝塚）



貝層の貝殻実測の様子（神田貝塚）



46ライン西壁の層序（大田原遺跡）

しもたばるかいつか
下田原貝塚

所在地：竹富町字波照間小字下田原
 調査年：1954年(学術調査)、
 1958年(学術調査)、
 1983～85年(圃場整備)
 調査者：金関丈夫、早稲田大学
 八重山学術調査団、
 沖縄県教育委員会
 調査原因：学術調査、圃場整備



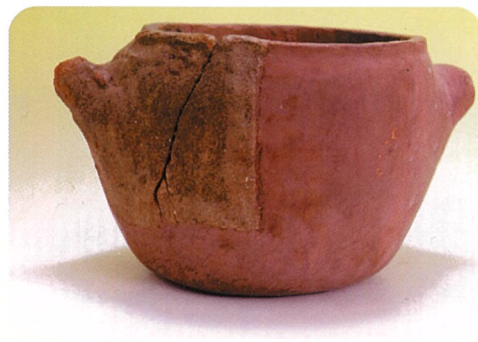
下田原貝塚は、波照間島の北側
 海岸に面した緩やかな斜面上に
 ある、南琉球新石器時代前期の
 遺跡です。最初の調査はかなせきただけお金関丈夫・

こくふなおいち たわだしんじゅん国分直一・多和田真淳らにより1954年に行われ、戦後の沖縄考古学研究の原点ともいべき遺跡となりました。1958年には早稲田大学による八重山調査の一環として発掘が行われ、とって把手をもつ土器が出土しました。この土器は「下田原式土器」として、八重山諸島の土器編年（早稲田編年）第Ⅱ期の指標となりました。しかし、1983年から行われた調査では、隣接する無土器である第Ⅰ期の遺跡であった大泊浜貝塚が、土器をもつ下田原遺跡よりも新しいことが確認されました。

この調査結果は、石垣島の神田貝塚と大田原遺跡の関係と同様であり、早稲田編年の第Ⅱ期が第Ⅰ期より古いことを改めて証明するもので、貴重な成果と言えるでしょう。



サメ歯製品



下田原式土器



柱穴・炉跡出土状況

はま い せき トゥグル浜遺跡

所在地：与那国町字与那国
調査年：1983年
調査者：沖縄県教育委員会
調査原因：与那国空港整備

トゥグル浜遺跡は、与那国島北海岸のトゥグル浜と呼ばれる小さな砂丘近くにある、与那国島で初めて確認された南琉球新石器時代の遺跡です。

遺物には、石器や骨製品、貝製品がありますが、土器は全く出土していません。また、それま

で宮古・八重山諸島では確認されていなかったサメ歯製品も出土しています。

土器がなく、^{きよくぼ ませいせきふ}局部磨製石斧を主体に、^{かいふ}貝斧も用いていることは、宮古・八重山諸島でのこの時代の遺跡と一致しています。これら南琉球文化圏の^{とうしよ}局部磨製石斧や貝斧は、東南アジア島嶼部や南太平洋諸島で出土する石斧や貝斧と類似しています。琉球列島最西端の与那国島で同様の遺跡が発見されたことは、南琉球の古代文化発生を考えるうえで、非常に重要な成果と言えるでしょう。



石皿出土状況



遺跡遠景



発掘の様子

開発と埋蔵文化財

復帰後の沖縄における開発には、多種多様なものがあります。

1975年の国際海洋博覧会の前後から沖縄自動車道の建設が始まり、一般道路の整備や農業基盤整備事業（土地改良事業）などが増加しました。特に、1987年の「総合保養地法」（リゾート法）制定後は、各地でリゾートホテルやゴルフ場の建設が行われ、海浜地域に限らず山手までが開発の対象になり、かなりの面積が開発されるようになりました。その後、銘苅古墓群などに見られるように、米軍基地用地返還に伴う大規模な区画整理や住宅建設が相次ぎ、埋蔵文化財の保護をめぐって大きな議論が巻き起こりました。

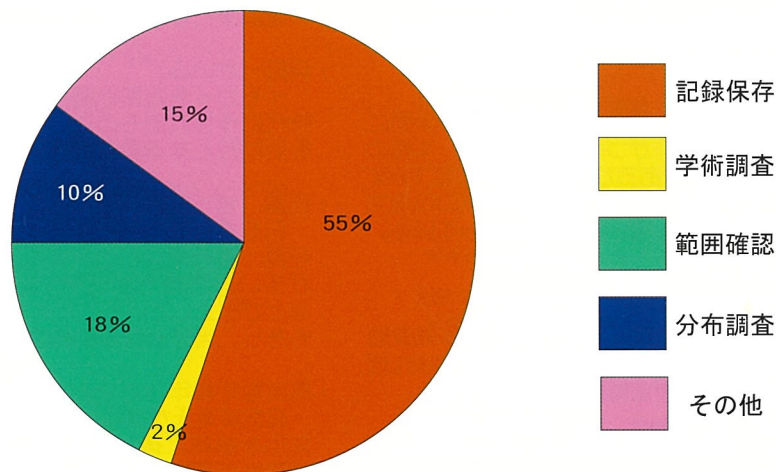
発掘調査の多くが開発に伴う緊急発掘調査のため、そのほとんどの遺跡は調査終了後、跡形もなく破壊される運命にあります。

しかしながら、文化財は国民の共有財産であり、先人の残してきた遺産でもあります。従って、私たちはそれを継承して、次世代へ橋渡しをしていく責務があるといえます。

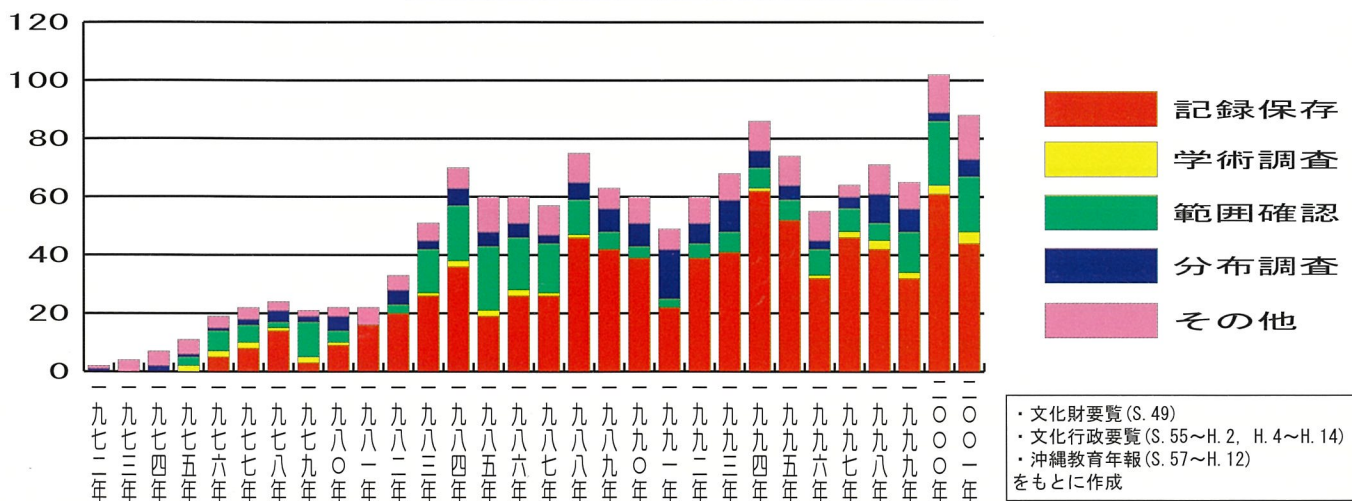
発掘調査を終了した仲原遺跡や仲泊遺跡のように、国指定の史跡として位置づけられ、環境整備が図られている事例などは、今後の文化財保護の進むべき方向性を指し示している好例だと思われます。

発掘件数の推移

復帰後30年間(S. 47～H. 13)における発掘調査の内訳



年度別発掘調査件数の推移



・文化財要覧(S. 49)
 ・文化行政要覧(S. 55～H. 2, H. 4～H. 14)
 ・沖縄教育年報(S. 57～H. 12)
 をもとに作成

用語解説

- ・遺物 (いぶつ)
発掘によって出土する過去の人々の生活の痕跡を何らかの形で示すもの。このなかで石器や土器のように加工されたものを人工遺物、加工の跡はみられないものの食用のために運搬され、のちに廃棄された貝殻や動物の骨などを自然遺物と呼ぶ。
- ・遺物包含層 (いぶつほうがんそう)
地下に堆積した過去の人々の生活の結果生じた遺物を含む地層。文化層ともいう。
- ・遺構 (いこう)
住居跡や石垣など、人間によって作られた物やその痕跡で、固定していて動かすことの出来ないもの。
- ・礫敷遺構 (れきじきいこう)
小さな石が敷き詰められた人間活動の痕跡。
- ・貯蔵穴 (ちょぞうけつ)
地下に穴を掘って物をたくわえる施設。
- ・オキナフウラジロガシ
ブナ科の高木。材は琉球建築の用材として利用されるほか、船舶材、シイタケ栽培用原木にも利用された。種子は加工して食用となる。
- ・爪形文土器 (つめがたもんどき)
細かな弧形の爪形模様を帯状に連ねた文様が土器の表面に付けられていることからこの名前がつけられている。沖縄の爪形文土器は約6,500年前のものであるが、本州では約10,000年以上前のものでされる。そのため、沖縄のものは本州の爪形文と異なる系譜のものではないかという見方が強くなっている。
- ・曾畑式土器 (そばたしきどき)
九州を中心に分布する縄文時代前期後半の土器。熊本県曾畑貝塚で発見されたことからこの名がある。古い段階では九州西部を中心とするが、次第に九州全域に分布を拡大する。
- ・突帯文 (とったいもん)
粘土紐を土器面に貼り付け、土器の表面から帯状に突出した文様のこと。
- ・蔵骨器 (ぞうこつき)
洗骨あるいは火葬骨を納める容器。
- ・編年 (へんねん)
歴史上の事柄の新旧・前後の関係を明らかにし、年代的序列をつけること。
- ・黒曜石 (こくようせき)
火山岩の一つで、灰色ないし黒色、半透明でガラス質。断面部を鋭利に加工することで石器として利用することがある。
- ・開元通宝 (かいげんつうほう)
中国で621年以降鑄造した銅銭のこと。
- ・後漢鏡 (ごかんきょう)
中国の王朝の一つで後漢時代 (西暦25年~220年) に製作された銅鏡のこと。
- ・カメヤキ
鹿児島県徳之島伊仙町で焼かれた古代~中世の須恵器のこと。カムイヤキともいう。
- ・窯 (かま)
窯は焼き物を作るための構造物で、平地に馬の蹄 (ひづめ) の形状に築かれたものを平窯、斜面に階段状に一段一段丸い天井の窯を作って、相互を穴で抜いて通気孔を設けた大規模生産用の窯を登り窯という。湧田古窯跡では平窯が複数発見された。
- ・ストーン・ポイリング
焼石と焼石との間に魚、肉、貝、芋などを入れて蒸す調理方法で、現在も南太平洋における一部の島嶼地域で見られる。
- ・尖頭器 (せんとうき)
広い意味では刺突用に先の尖った部分を持つ石器・骨角器・木器の総称。
- ・貝製品 (かいせいひん)
貝殻を素材に様々な加工された製品の総称。貝匙・貝皿・貝錘・などの実用品と貝札 (符)・貝輪・玉類・垂飾品などの装飾品とがある。
- ・貝符 (かいふ)
イモガイを方形に割りとって作った札状の製品。特に弥生時代に作られたものは、中国の青銅器に見られる文様の影響を受けたとする見方がある。
- ・石器 (せっき)
石を素材として作られた用具のこと。一般に道具の類を石器、装飾品などの非実用的なものを石製品と呼ぶ場合が多い。沖縄では石斧・磨石・凹石・叩き石・石皿・石鏃などが出土している。九州で産する黒曜石などが出土することもあり、当時の交流の範囲を推定することも出来る。
- ・高宮暫定編年 (たかみやざんていへんねん)
高宮廣衛氏が提唱した沖縄諸島の土器編年。沖縄諸島の先史文化を前期と後期に二分し、後期を弥生時代~平安時代に對比させて時期区分をおこなった。
- ・骨角器 (こつかくき)
獣・魚・鳥の骨、角、歯牙などで作った製品の総称。錐や針などの実用品、髪飾り、腕輪などの装飾品がある。沖縄ではイノシシの骨・牙、ジユゴンの骨、サメの歯などで作られた製品が出土している。

参考文献

- 『渡貝知東原一第1～2次発掘調査報告』 読谷村教育委員会, 1977年
- 『古我知原貝塚一沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)』 沖縄県教育委員会, 1987年
- 『仲泊遺跡発掘調査概報(1)』 沖縄県教育委員会, 1975年
- 『仲泊遺跡—1975・1976年度発掘調査報告書』 恩納村教育委員会, 1977年
- 『仲泊遺跡—1977年度発掘調査報告書 環境整備報告書』 恩納村教育委員会, 1978年
- 『史跡 仲原遺跡—保存整備事業報告書』 与那城町教育委員会, 1997年
- 『室川貝塚 範囲確認調査報告書』 沖縄市教育委員会, 1979年
- 『室川貝塚—総合庁舎建設に伴う範囲確認調査及び東地区発掘調査の報告書』 沖縄市教育委員会, 1993年
- 『室川貝塚—沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書』 沖縄市教育委員会, 1997年
- 『具志川島遺跡群—第一次発掘調査報告書』 伊是名村教育委員会, 1977年
- 『具志川島遺跡群—第二次発掘調査報告書』 伊是名村教育委員会, 1978年
- 『具志川島伊敷群—岩立地区埋葬遺構の調査—第三次発掘調査報告書』 伊是名村教育委員会, 1979年
- 『具志川島遺跡群—第四次発掘調査報告書』 伊是名村教育委員会, 1981年
- 『具志川島遺跡群発掘調査概要 ○岩立遺跡西区 ○具志川島遺跡群西地点 ○親畑貝塚』 伊是名村教育委員会, 1991年
- 『具志川島遺跡群』 伊是名村教育委員会, 1993年
- 『前原遺跡—県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書』 宜野座村教育委員会, 1999年
- 『伊江島具志原貝塚』 伊江村教育委員会, 1978年
- 『伊江島具志原貝塚の概要』 沖縄県教育委員会, 1985年
- 『伊江島具志原貝塚発掘調査報告』 沖縄県教育委員会, 1997年
- 『具志原貝塚及び周辺整備基本構想—“古代の島人と貝の道ミュージアム”～古代島人の元気で豊かな生活と「貝交易のシマ」の再現』 伊江村教育委員会, 2001年
- 『木綿原—沖縄県読谷村渡貝知木綿原遺跡発掘調査報告書』 沖縄県読谷村教育委員会・読谷村立歴史民俗資料館, 1978年
- 『沖縄県・久米島具志川村 清水貝塚 発掘調査報告書』 具志川村教育委員会, 1989年
- 『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚 発掘調査報告』 具志川市教育委員会, 1980年
- 『稲福遺跡発掘調査報告書—上御願地区』 沖縄県教育委員会, 1983年
- 『稲福村落—稲福村落第一次調査報告書—村落形成過程の考古学的研究』 琉球大学考古学研究会, 1971年
- 『稲福遺跡—発掘された琉球の原始村落』 稲福遺跡考古資料館 琉球考古学研究会編, 1974年
- 『首里城跡—歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかるとの遺構調査』 沖縄県教育委員会, 1988年
- 『首里城跡—首里城正殿跡の遺構調査』 沖縄県教育委員会, 1992年
- 『首里城跡—南殿・北殿跡の遺構調査報告』 沖縄県教育委員会, 1995年
- 『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書(1)』 沖縄県教育委員会, 1998年
- 『首里城跡—御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告』 沖縄県教育委員会, 1998年
- 『首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書』 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2001年
- 『首里城跡—下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2001年
- 『首里城跡—継世門周辺地区発掘調査報告書』 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2002年
- 『湧田古窯跡(1)—県庁舎行政棟建設に係る発掘調査』 沖縄県教育委員会, 1993年
- 『湧田古窯跡(II)—県庁舎議会議棟建設に係る発掘調査』 沖縄県教育委員会, 1995年
- 『湧田古窯跡(III)—県庁舎警察棟建設に係る発掘調査』 沖縄県教育委員会, 1997年
- 『湧田古窯跡(IV)—県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査』 沖縄県教育委員会, 1999年
- 『銘苅古墓群(1)—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書V』 那覇市教育委員会, 1998年
- 『銘苅古墓群(II)—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書VI』 那覇市教育委員会, 1999年
- 『銘苅古墓群(III)—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書IX』 那覇市教育委員会, 2001年
- 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(1)—南部編』 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2001年
- 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(II)—中部編』 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2002年
- 『浦底遺跡発掘調査写真集』 城辺町教育委員会, 1990年
- 『多良間添道遺跡—発掘調査報告』 多良間村教育委員会, 1996年
- 『名蔵貝塚ほか発掘調査報告 一名蔵貝塚・ピユウツタ遺跡発掘調査報告書』 石垣市教育委員会, 1997年
- 『大田原遺跡発掘調査概要』 石垣市教育委員会, 1980年
- 『大田原遺跡—沖縄県石垣市名蔵・大田原遺跡発掘調査報告書』 石垣市教育委員会, 1982年
- 『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告』 沖縄県教育委員会, 1986年
- 『与那国島 トウグル浜遺跡—与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査報告』 沖縄県教育委員会, 1985年
- 『平敷屋トウバル遺跡—ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』 沖縄県教育委員会, 1996年
- 『石垣島の遺跡—詳細分布調査報告書』 沖縄県教育委員会, 1979年
- 『資料編集室紀要 第21号』 沖縄県立図書館資料編集室, 1996年
- 『沖縄県史 資料編10 考古1 遺跡総覧(先史時代)』 沖縄県教育委員会, 2000年
- 『日本の古代遺跡 47 沖縄』 森浩一企画 高元政秀 安里嗣淳共著 保育社, 1993年
- 『概説 沖縄の歴史と文化』 沖縄県教育委員会, 2000年
- 『沖縄 八重山』 溝口 宏編 校倉書房, 1960年
- 『沖縄の歴史と文化』 沖縄県教育委員会, 2000年
- 『沖縄縄文土器研究序説』 高宮廣衛 第一書房, 1993年
- 『沖国大考古 創刊号』 沖縄国際大学文学部考古学研究室, 1976年
- 『沖国大考古 第2号』 沖縄国際大学文学部考古学研究室, 1978年
- 『沖国大考古 第3号』 沖縄国際大学文学部考古学研究室, 1979年
- 『沖国大考古 第4号』 沖縄国際大学文学部考古学研究室, 1980年
- 『沖国大考古 第5号』 沖縄国際大学文学部考古学研究室, 1981年
- 『沖国大考古 第6号』 沖縄国際大学文学部考古学研究室, 1982年
- 『具志堅貝塚の概要』 本部町教育委員会, 1985年
- 『具志堅貝塚 発掘調査報告』 本部町教育委員会, 1986年
- 『ヤッチのガマ・カンジン原古墳群—県営かんがい排水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2001年
- 『伊佐前原遺跡—沖縄幹線新設工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 宜野湾市教育委員会, 1993年

協力者一覧

企画展「復帰後三十年間の県内発掘調査展」を開催するにあたりましては、
下記の機関に多大なご協力を賜りました。
ここに記して深く感謝申し上げます。

(五十音順)

【出品協力】

石垣市教育委員会
沖縄国際大学
宜野座村教育委員会
具志川市教育委員会
城辺町教育委員会
那覇市教育委員会
読谷村教育委員会

【写真協力】

石垣市教育委員会
伊是名村教育委員会
沖縄国際大学
宜野座村教育委員会
具志川市教育委員会
城辺町教育委員会
久米島町教育委員会
国営沖縄記念公園事務所
多良間村教育委員会
那覇市教育委員会
読谷村教育委員会

企画展

復帰後三十年間の県内発掘調査展

2002年11月発行

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125

沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL 098-835-8752

FAX 098-835-8754

<http://www.maizou-okinawa.gr.jp>

印刷

(株)東洋企画印刷

〒900-0024

沖縄県那覇市古波蔵4-1-1

TEL 098-831-7404

FAX 098-831-9958

主要遺跡分布図

